

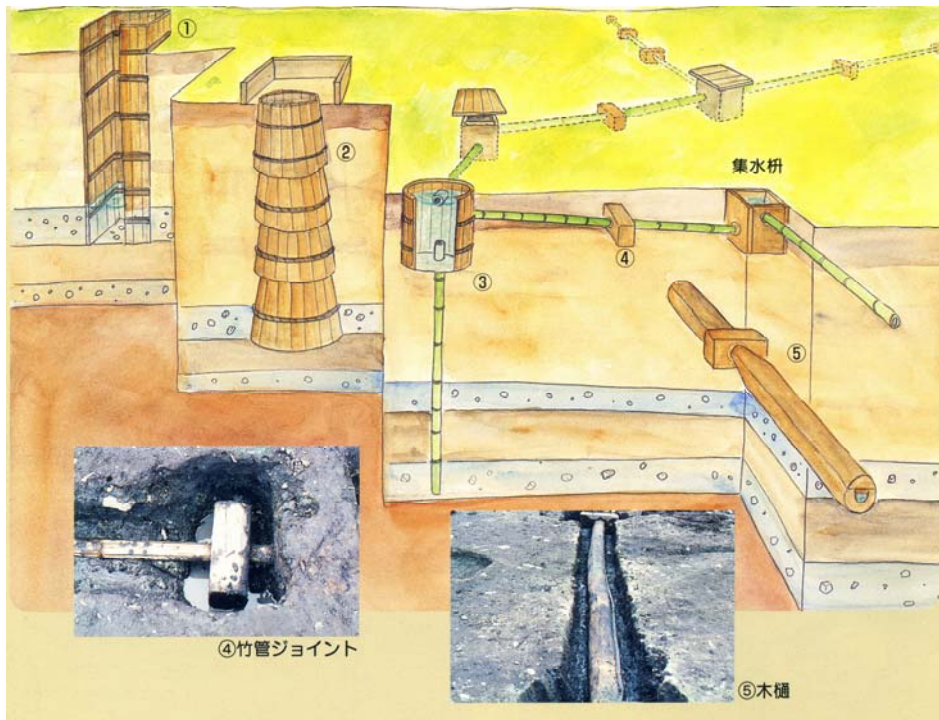
埋樋による上水道

松本市に現在ある上水道が設置されたのは大正13年です。島内の蛇原の地下水を水源にして城山へ配水池を設置して市内へ配水しました。しかし、それ以前にも井戸や河川によらないで水を確保する工夫が行われていました。埋樋による引水です。松本の城下を発掘するとその跡がそこそこから見つかります。

1 仕組み

生活用水を確保するには、自然流を利用する方法と人工的に造った井戸や引井を使う方法とがあります。井戸は湧水を利用するものと水脈まで地面を掘りくみ上げて使うものがあり、湧水地帯の南深志には前者が、標高がやや高い北深志には後者が多く設けられました。引井は導水してきた水を集水枡に受けて使う井戸です。

発掘によって湧水地帯の井戸の変遷が分かってきました。17世紀前半までは、帯水層まで四角い木枠を組んで井戸にしていました。18世紀代になると、桶をいくつも伏せて重ね、水をためる形式になり、19世紀になると節を抜いた竹筒を帯水層まで差し込み、地表に桶をおいて水をためる形式の井戸が出てきます。



『発掘でわかった
郷土の歴史
松本のむか～し
むかし』より

いっぽう、北深志には道の辻に設けられた井戸の跡がいくつか残っています。辻井戸とよばれています。これらの井戸の枠は石組みで、南深志の木造とは異なる構造になっています。北深志の辻井戸は現存しているものも蓋がされていて中をのぞいたりすることはできにくい状態になっています。



(北深志の井戸の分布については、安原地区という限定はありますが、安原地区街づくり研究会が新町緑地に掲示してある分布図が参考になります。また『松本市史』第2巻歴史編Ⅱ近世にも北深志の辻井戸の分布図が載っています)。

安原地区の井戸の分布
(新町緑地にある表示板)

引水は、竹の節を抜いたものや木をくりぬいたものを土中に埋め、地形の傾斜を利用して水を引きました。竹や木の管を継ぐときは木製の継手つぎてを使用しました。また、地表に



枡しゅうすいすを設けて水をため（集水枡という）、所々で水を利用できるようにしてあります。水気が多い場所では、当時使われた木竹製の部材が腐らずに地中にそのまま残っています。鉄管や鉛管がつかわれていないだけで、まさに現代の上水道と同様です。これら発掘された実物は、松本市立博物館の一階に展示されていて、古山地御殿にあった「ててまがりの井戸」とともにみることができます。

出土した木管やつなぎ（松本市立博物館の展示）

2 町屋の埋樋

旧版『松本市史』から、町屋への引水の様子をまとめてみましょう。

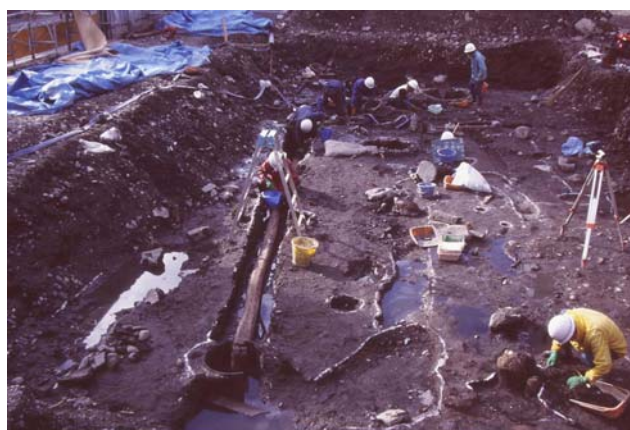
中町は元禄（1688～1703）ころに藤森太兵衛が家業の酒造を行うため、お玉ヶ池付近（現在のカタクラモールあたりにあった池）から引水した。これが南深志の引水の最初であった。

本町2丁目は、1755（宝暦5）年に長松院ちようしょうや宝泉院ほうせん（現在の瑞松寺）の裏手の6ヶ所の湧水を集め、生安寺しょうあんじ小路（現在の高砂通り）を經由して埋管した。この時の中町2丁目の世話人は、今井六右衛門ら8人で、工事を請け負ったのは同じ2丁目の澤木吉右衛門であった。この水路の途中にある宮村町や小池町や飯田町へも辻井を設けて水を分けた。のちの1805（文化2）年には本町1丁目も長松院内に別の源泉を設けて本町2丁目の引井に合流することになり、流末は1丁目へもいくことになった。

本町3丁目と4丁目東側は、鍋屋なべや小路（現在の駅から県の森へ行く道筋）を經由して埋管した。水源は現在の市民芸術館近辺であった。1752（宝暦2）年に鍋屋小路角に井戸ができて汲み始めたとの記事があるので、本町2丁目より早く設置されたかもしれない。

本町4丁目の西側と5丁目は、天神小路を經由して埋管し、水源は現在の市民芸術館付近であった。

このように、現在のカタクラモールから市民芸術館にかけての湧水地帯を主な水源にして引水し、途中の町には辻に引井を設けあるいは分水して、本町まで埋管によって水を運んでいました。その時期は早くは1700年代初めで、1800年代の初めにはかなり普及していたことがわかります。



本町の発掘で出土した埋樋（平成9年）

3 武家地の埋樋

湧水地帯にある武家地でも、井戸や埋樋が発掘されています。三の丸の土井尻地籍（現在の大手駐車場の場所）からは、24基の井戸が発掘されました。その内訳は、16世紀から17世紀前半の地層から1基、17世紀後半から18世紀前半の地層から10基、18世紀から19



武家地の発掘で出土した方形の井戸枳どいじり（土井尻 平成3年）

世紀の地層から13基でした。このうち、13基の井戸が見つかった18世紀から19世紀の地層からは、木樋が2、竹管が10発掘されました。武家地でもこの時代に埋樋を用いた上水道のシステムが広く取り入れられたようです。

土井尻地点の発掘の成果によって、最初に紹介した井戸の仕組みの移り変わりが明らかになりました。(新版『松本市史』 発掘調査概報『松本城三の丸』)

4 二の丸御殿の引水

城内の御殿にも引水がされていました。二の丸御殿の跡地の北西部には台所があり井戸枠が復元されています。

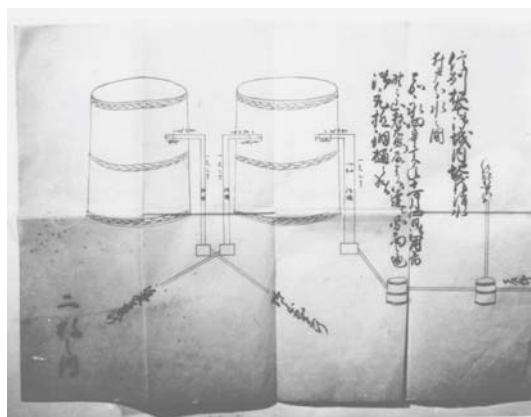
二の丸御殿跡が発掘調査されたときのことです。みつかった井戸跡は底に板が敷かれていて、地下から湧き出る水が出てくる穴がありませんでした。発掘を担当した人たちの間でも、湧水の井戸か引水による井戸か議論が分かれたといいます。当時長野県立図書館に保管されていた県庁文書(現在は長野県立歴史館に収蔵)のなかに、その疑問を解決する文書がありました。旧筑摩^{ちくまけん}県から長野県に引き継がれた文書群のなかにあつた旧松本藩関係の文書です。

その図には、地蔵清水の井戸から分水する様子が、井戸枠と分水口の大きさと分水先を示す絵で描かれています。時代は幕末の嘉永4年です。当時地蔵清水の井戸は、桶を伏せた形のもの地上に2基ありました。そこに出水口をあげ、流れ出る水を樋をつかって、近所武家屋敷に2流、二の丸御殿の台所と土井尻方面へ1流と分けていました。井戸から出る水量をきちんと分割するため、水の流水口はそれぞれに大きさが決められていました。台所と土井尻方面へ引かれる水の口が一番大きく縦1寸(約3cm)横3寸4分(約11cm)あります。この口から出た水は葵の馬場を西へ引かれ、途中で二の丸御殿へ分水し、最終は土井尻まで行って行っていました。ここでは井戸から地中の管に流し込む部分は銅製の樋が使われました。

地蔵清水の井戸水は、御殿の台所の水をまかない、付近の武家屋敷に水を供給し、末端は葵の馬場・西堀とほぼ外堀を半周する形で土井尻まで行って行っていました。



二の丸御殿跡に復元されている井戸枠



地蔵清水の井戸の分水を記した文書

以上みてきたように、松本の町の中は、湧水地帯は自噴する井戸を活用し、湧水地帯から少し離れたところは木・竹製の管を埋蔵して引水し、北部の微高地では掘井戸を築くというように、それぞれの土地にあった方法で水の確保がなされていました。

松本は、昔も今と変わらぬ豊かな水の町でした。